



ビールとソーセージ、それから？

ドイツを知る *Bier, Wurst und?*

栄光のドイツサッカー物語

明石 真和／著 大修館書店 2006.6 783.47 /7カ

ワールドカップでも3度の優勝を誇るサッカー強豪国、ドイツ。1974年ワールドカップ優勝チームを率いた名監督ヘルムート・シェーンの人生を中心に、ドイツサッカー黄金時代を振り返る。

私は東ドイツに生まれた

フランク・リースナー／著 東洋書店 2012.3 234.07/7カ

1990年、ドイツが再統一され、東ドイツという国が姿を消した。一党独裁、国家による住民の監視など、ネガティブなイメージもある国だが、住民はどんな暮らしをしていたのだろうか？ 24歳で再統一を迎えた著者が、東ドイツでの普通の生活を伝える。



ベルリン、ミュンヘン…

ドイツを旅する *Gute Reise!*

ドイツメルヘンのひそむ街で

金成 陽一／著 大和書房 1997.8 943/7カ

グリム兄弟の生まれた町、赤ずきんのふるさと、ねずみとり男伝説の町…。グリム童話のふるさとをドイツ文学者が旅した旅行記。中世の面影を残すドイツの魅力が、実体験を交えて語られる。

世界を読む 1

ドイツ！



メルヘンが生まれた国ドイツ。ドイツ文学にはファンタジーをはじめ、おもしろいお話がたくさんあります。文学のほか、ドイツについて知る本も集めました。本を通してドイツへの旅に出かけよう！



ティーンズコーナー
ミニ展示
2014.3.14~5.6

愛知県図書館

地下鉄丸の内駅 8番
から徒歩 5分
052-212-2323

魔法の声

コルネーリア・フンケ／著 WAVE 出版 2003.11
70J943/7カ

メギーは本が大好きな女の子。本の修繕士をする父モーと二人で暮らしている。ある夜二人の家に、「ホコリ指」が訪ねてきた。彼はモーのことを「魔法舌」と呼ぶ。実はモーは、不思議な力を持つ「魔法の声」の持ち主なのだ。この夜以来、メギーは悪と立ち向かう大変な冒険に巻き込まれる！『魔法の文字』、『魔法の言葉』と続く「物語」をめぐる冒険ファンタジー。



メルヘンの国から **Deutsche Literatur**

ドイツの文学

紅玉 (ルビー) は終わりにして始まり

ケルスティン・ギア / 著 東京創元社 2013.2 〒0/J913/04

グウェンドリンはいたって普通の女子高生。一方、同じ年のいとこのシャーロットはタイムトラベラーとして期待され、綿密な準備教育を受けている。ところが、タイムトラベルの予兆が起こったのはグウェンドリンの方だった！相棒になったギデオンは完璧な美男子だけど傲慢で嫌なやつで…。ドイツ発タイムトラベルシリーズの第1弾。

クラブアート

オトフリート = プロイスラー / 作 偕成社 1986.2 〒0/J943/70

14歳の少年クラブアートは、ある日夢の中で聞いた声に導かれて、荒地の水車場の見習いになる。そこは、魔法使いの親方が支配する決して逃げ出せない場所だった。11人の職人仲間たちと共に働きながら、金曜の夜には親方から魔法を習うクラブアート。ある日、澄んだ声を持つ少女に恋をするが…。

14歳、ぼくらの疾走

ヴォルフガング・ヘルンドルフ / 作 小峰書店 2013.10 〒0/J943/81

マイクはベルリンの14歳。学校でも家でもさえない毎日を送っている。そこへ、ロシアから転校生チックがやってくる。チックは酔っ払って登校してくるような変わり者で、マイクも全然好きじゃなかった。しかし、夏休みになぜか2人で、オンボロ車に乗って無謀な旅に出ることになる。そしてそれは、今までで最高の夏の始まりだった！

飛ぶ教室

ケストナー / 著 岩波書店 2007.11 J943/75

ドイツの国民的作家ケストナーが描くクリスマスの物語。登場するのは、同じ寄宿学校に暮す5人の少年たち。けんかの強いマティアスはいつもお腹をすかして、弱虫のウーリは自分が臆病なことを恥じていて…。5人の友情とそれを見守る大人たちが温かく描かれる。



遺失物管理所

ジークフリート・レンツ / 著 新潮社 2005.1 943.7/17

ヘンリーは駅の遺失物管理所に異動になった。窓際的な部署だが、出世などには興味のないヘンリーは、そこでの仕事を楽しんでいる。鳥の入った鳥かご、ホッケーのスティック、ナイフ投げ芸用のナイフ…なんといういろいろなものをもひとは列車に置き忘れるのだろう。

ちいさなちいさな王様

アクセル・ハッケ / 作
ミヒャエル・ゾーヴァ / 絵
講談社 1996.10 〒0/J943/87

僕の部屋には小さな王様が現れる。人差し指くらいの大きさで、ひどく太っている。大好物は熊の形をしたグミキャンディー。王様のところでは、僕のところとは違って大人として生れて、どんどん小さくなっていくらしい。実際王様も、少しずつ小さくなっていくようだ。

死神さんとアヒルさん

ヴォルフ・エアルブルッフ / 作・絵
草土文化 2008.2
E/17

ある日アヒルさんは、自分の後ろにいる死神さんに気がつく。この死神さん、死神だということ以外はなかなか感じがよく、二人は一緒に沼に行ったり、死について語り合ったりする。そしてある夜、寒さを感じたアヒルは…。